

しては、満足すべきものでなく、内視鏡、X線学的にも、診断が困難で、胃平滑筋肉腫との鑑別も、臨床上重要なことであり、胃生検細胞診の進歩、改良が望まれるところである。

5. 早期食道癌の一例

田畑陽一郎 (千大)

患者 ○林○ 56才 男性 公務員

昭和45年6月頃より嚥下障害があり、翌46年2月来院。食道X線、内視鏡検査で胸部中部後壁に小さな浅い潰瘍を中心とし全周にわたる大小不同の小隆起があり、生検で異型度3ないしCa. in situの所見が得られた。早期食道癌が強く疑われたが、肝障害が高度であることも考慮し厳重に経過観察し、術前の生検でCa. in situの確定診断のもとに、同年8月25日、右開胸開腹胸部食道全摘頸部食道外瘻兼胃瘻造設術を施行した。切除標本は5×全周(2.6cm)の表在型、限局型の類表皮癌で、CAT 3, SAT 2, INF β, 深達度は粘膜下層までに止まり、リンパ節転移は認められなかった。術後、肝障害高度のため、10月12日、内科転科し以後経過良好である。なお、既往歴に昭和35年食道ポリープの診断のもとに5510radの放射線治療を受けている。以上の早期食道癌の1例を報告し、あわせて本邦のその文献的考察を試みた。

6. 腸間膜囊腫による小腸軸捻転症の一治験例

竹内 英世 (千大)

本邦における小児腸間膜囊腫は明治36年三村の報告以来現在までに113例あった。最近われわれは腸軸捻転症を合併した1例を経験したので報告する。症例、6才7ヵ月、男児。主訴、腹部痙攣と下腹部腫瘍。突然痙攣様の腹痛と嘔吐があり、翌日再度嘔吐と腹痛があり症状軽快せず、さらに下腹部腫瘍を指摘され来院。入院時、体格栄養中等度、顔貌正常、下腹部に柔軟なる小児頭大の腫瘍を触れ腸雑音の高進を認む。S状結腸軸捻転の診断で開腹すると、回盲部末端より口側約20cmの腸間膜に小児頭大の囊腫があり、回腸が囊腫とともに腸間膜を軸として反時計方向に270度回転していた。これを整腹し、回腸を囊腫を含めて約20cm切除し端々吻合した。囊腫の大きさ14×13×7cm, 720g, 内容は漿液性で、単房性であった。術後経過良好で全治退。組織学的所見はリンパ管系に起因すると思われる腸間膜囊腫であった。

7. 直腸閉鎖の一治験例

浜野 頼隆 (千大)

生後2日、男児で、主訴は腹部膨満、胆汁性嘔吐。浣腸を試みたが挿入不可能で、当科に紹介された。既往歴には特記すべきことはない。生下時体重3150g。外見上異常なく、肛門は正常位、括約筋反射も正常。直腸内指診で、肛門より約1.5cmに閉鎖部を認めた。腹部単純レ線、注腸レ線、ワングステン・ライス体位によるレ線で、先天性直腸閉鎖症と診断。閉鎖部の中央を穿刺すると約2mmの膜を抜けた所より胎便の排出を認めたので、膜様部中央に切開を加え、拡張の後、ネラトンNo. 8を留置した。摘出組織は、正常直腸粘膜であった。術後1週間目より手指によるブジーを開始し、3週で退院。2ヵ月後の現在、軽い狭窄を認めるが、失禁そのほか排便機能異常はない。

以上稀な直腸閉鎖症の一例を報告し、併せて、肛門直腸奇形、特に本邦Gross 4型(直腸閉鎖症)を中心に文献的考察を行なった。

8. ウィルヒョウ転移を伴った食道R早期癌の一例

新井 裕二 (千大)

症例。61才、男性。昭和45年1月中旬、左鎖骨上窩腫瘍に気づく。3月11日肺外科で同腫瘍生検、扁平上皮癌のリンパ節転移と判明し原発巣が探求された。3月16日、当科で食道鏡、生検細胞診を行ない早期食道癌と診断。食道X-PではIuの部位鋸歯型。食道鏡検査では上門歯列より25cm 2°~7°にかけて粘膜面に大小不同の凹凸あり。500Rずつ5日間計2500R⁹⁰。術前照射。5月15日手術、右開胸胸部食道全摘出、頸部食道外瘻造設兼胃瘻造設術施行。切除標本では大きさ2×2cmで不規則な地図状の浅い糜爛と小隆起が混在。組織所見では粘膜表皮内に限局した扁平上皮癌であった。以上私は粘膜上皮内にとどまる早期癌で鶏卵大のウィルヒョウ転移を認めたきわめてまれな1例を報告し、早期食道癌44例についていささかの考察を加えて発表した。

9. 死体腎移植後3年6ヵ月経過した症例

大熊 秀一 (千大)

患者は38才の男性で慢性腎炎による尿毒症のため、26回の血液透析を受けた後、脳挫傷で死亡した30才の男性を供腎者として移植術が施行された。組織適合性は良好でwarm ischemia time, total ischemia timeはそれぞれ、1時間半および4時間であった。術後経過中10週頃、高度の発熱を伴う粟粒結核を合併したが早期の発見と治療で治癒せしめた。術後1年以降における死